

秦代經書學に於ける儒家の傾向

著者	内野 熊一郎
雑誌名	漢文學會々報
巻	6
ページ	49-63
発行年	1937-11-05
URL	http://doi.org/10.15068/00146815

秦代經書學に於ける儒家の傾向

内 野 熊 一 郎

序

秦代政治文化一般は、法家の因今不循古的法治主義の旺盛な躍進を続けようとしてゐたが、其の躍進の要所要所で、やはり回顧的に、周代古文化の精神をふり返り、現實の理念に反省を加へざるを得なかつた。統一直後に於て、政治形態の根本形式たる「禪讓か世繼か？封建か郡縣か？」などを始め、庶般の事項に及ぶまで、皆其の決定には古代文化の精神が參見されてゐるのである。但、その結果から見れば、いつも因今不循古的躍進政策が採用されたのに過ぎない。かの禁書禁學の如きも、其の半面では、やはり、博士官學の設置により周代古文化理念への反省參酌が行はれてゐると見らるべきであらう。畢竟、無制限なる復古的自由横議は秦代建國作業に摩擦あるを以て、之を官權的統制下に置かうとしたのであり、官權統制下に於て之を利用し發現せしめようとしたのであらう。

かくの如く、因今不循古主義的文化傾向の半面に、淀み淀んで底流しつゞけてゐる周代古文化傾向の主たるものこそ儒家の復古的道徳禮治主義文化そのものであり、眞の秦代文化の生誕は却て此の底流があつて、其の上に因今不循古的文化が奔流し續けた所に見出されるであらう。

然らば此の秦代儒家の復古的、道徳主義文化は、其の經書句說學上に於ては如何なる傾向性を生成させてゐるだらうか？即ちここに此の問題を考察せんに、秦代儒家の經書學は勿論其の復古尙古的思想態度と及び道徳禮治的思想内容等に多分に影響されて存すると言はねばならない。隨つて、秦代儒家の經書學に於ける傾向性の問題は、實に、

「秦代儒家の循古的道德禮治思想態度並に思想内容が、如何様に、

(一) 民間私學乃至博士官學に分布影響し、

(二) 周代經書師說を重視傳承し、

(三) 道德禮治的經說を成生し來たか？

而して、此等經書學上の諸事象は、實に又、如何に、

(四) 漢代經書學へ影響關與し、(今古文說にも關與し) 然も亦、

(五) 秦代經書經說學の片鱗をも顯示してゐるか？」

と言ふこと等の命題に置換へ得るであらう。以下、此等の命題に従つて之を詳究して見たいと思ふ。

秦代儒家の「循古尙古」的思想態度は、呂覽に於ては長見篇中に窺伺される適例あり、即ち、

「今之於古也、猶古之於後世也、今之於後世、亦猶今之於古也、故審知今、則可知古、知古則可知後、古今前後一也、故聖人上知千歲、下知千歲也。」

と言ふものがそれである。蓋し、「古今前後一也、」と觀するのであり、此は「古より今に至り更に未來後世に及ぶまで同一不變なる社會と及び其の社會に行はれる道・原理とが存し、隨て古を知れば今を知り未來を知る事が出来る、」とする態度である。夫の「古今相異、因時變法、」を説く法家の態度とは大いに異なるのである。隨て、「古今相一」を持つる態度は、今の典則として古を見、今の原理を古に見出すのであり、かくて古代は尊尙され、古代理念は傳承されるのである。

而して、此の循古尙古的態度は古く儒家の最も堅持した所であるが、秦代法家態度極盛時に在つても、やはり存行してゐた様である。

然も史實的に見ても、秦代に此の循古的儒家思想態度は汎行した事が知られるのであり、例へば、始皇卅四年に、儒家、博士齊人淳于越があり、始皇に獻替して、周代封建の古制に師順すべき事を説き、

「臣聞、殷周之王千餘歲、封子弟功臣、自爲枝輔、今陛下有海內、而子弟爲匹夫、卒有田常六卿之臣、無輔拂、何以相救哉、事不師古而能長久者、非所聞也、」(始皇本紀)

といふなどは、その適例であらう。而して、李斯が之に反對上奏を行つて、「五帝不相復、三代不相襲、各以治、非其相反、時變異也、……今諸生不師今而學古、以非當世、惑亂黔首、……如此弗禁、則主勢降乎上、」(始皇本紀)と説いたのであるが、此の李斯の「當今の諸生は今を師とせずして古を學び従ふものが多い、」といふ言葉は、却て當時の學者諸生中には循古尙古的な儒家的思想態度を持する者が鮮少でなかつたことを推察するに難からぬものであらう。かの始皇廿八年、泰山封禪の際には、齊魯の儒生が古禮制に従つて封禪すべき事を奏言してをり、(封禪書)、又始皇の時に、鮑白令は禪讓を去り世繼を説き(說苑至公篇)なしてをる等は、皆始皇時に儒家の循古的的思想態度を堅持する者の鮮くなかつた事を示す好例であらう。而して特に、始皇の長子扶蘇が帝を諫言して、

「諸生皆誦法孔子、今上皆重法繩之、臣恐天下不安、」(始皇紀三十五年)、

と奏言したものなどは、實に、當時に於ては儒家的思想態度が尙多く行はれてゐて、賢明なる皇長子扶蘇の如きは之に違はんとしたものであり、儒家的文化傾向の支持者であつたと言ひ得よう。

要するに、秦代儒家的思想態度は、今日、史籍に残存する所によれば、博士淳于越、鮑白令、齊魯の儒生、皇長子扶蘇、等によりて、秦朝の廟議に上された事が知られるのであるが、それはやはり、秦代政治文化傾向の主流には抗し得ないで、其の底流となつて流れ続ける外になかつたものであつた。

然らば、此の如き秦代儒家の「循古不因今」的思想態度は、秦代學界思想界的には、如何なる發現をしたであらうか。

抑々、此の態度は、始皇の初めから、煩冗にして時勢に不適と考へられ、多くは採用されなかつた様であるが、李斯に至つて、其の「諸生不師今而學古、以非當世、……善其所私學、以非上之所建立、」（始皇紀卅四年）の事を惡み、遂に禁書・禁學・立博士の事が行はれるに至つた。即ち、「今を師とせず古を學び、私學する所に從つて公上の建布する法を誹る」といふ態度は、循古不因今の儒家思想態度に外ならないから、畢竟、此の儒家的態度は李斯の法家的態度をして禁學・禁書・立博士せしめる一因字となつたものと察せられよう。

然るに、禁書禁學の結果は、博士官職の學の外は、孔鮒（或は孔惠）・伏生の如き經書の匿藏と、及び儒學者の避居私授とを生ぜしめ、齊魯の間に私學が流行する様になつた。其の私學者の群は、恐らく、荀子の門下中、齊人淳邱伯・魯人毛亨・陳鳧・等を始め、孔家裔孫孔惠・孔甲、及び高堂生・田何・顏芝・胡毋生・轅固生、其他齊魯の儒諸生、或は七十子後學等が多數に存したであらう。

併し、此の儒家中でも、立つて秦博士職として官學派に屬した者も鮮くはなく、伏生を始め、（漢本傳）叔孫通・（漢本傳）羊子（漢志）・周正先（漢京房傳注）等はそれであり、又張蒼の如きも秦柱下の方書を司どつたらしいのである。但、此等の博士官は、員に備はるのみのものと化してしまつた事で、其の限り循古不因今の儒家態度の宣揚は恐らく不能にされてではあつたらう。

かくの如くに、秦代儒家の循古不因今の態度は、秦代文化學問の官學的統制を馴致せしめ、官私二學派の分立を起因せしめたものであると推論されるのである。而して、秦代儒家の主要なる人達は、多く官學派よりも寧ろ避居私授の私學派中に存してゐ、隨て眞の經書學は此等私學派中に傳存せられた觀があると言はるべきであらうか。

かくて、此等儒家による秦代文化・學問は、やはり漢代に直接多分に傳承されていつた事であるが、それ等の史實上よりする考究に就ては、曾て「斯文」第十九編四號「秦代經書學に於ける法家の傾向」、七十三頁中に略説したから、今は省略に従ひたい。

二

次に、秦代儒家の循古尚古の思想態度は、經書學上に於て、古來相傳の舊說師法を重視傳承していく風尚に富んで、所謂師法觀念を重視する傾向を有するものである。例へば呂覽勸學篇で、「聖人生於疾學、疾學在於尊師、師尊則言信矣、道論矣」といひ、尊師觀念を高調してをり、特に尊師篇では、「君子之學也、議義必稱師、……聽從不盡力、命之曰背、說義不稱師、命之曰叛、背叛之人、賢主弗內之於朝、君子不與交友、」とて、明白に師說を稱述すべき師法尊重的觀念を力説してゐるのである。蓋し、此等は儒墨兼習の秦人が説きなしたものと推され、此の師法觀念が秦時儒墨家間に既に萌してゐたことを知るのである。而して、師法師說の重視といふことは、經說學的實際面に於ては、例へば其の經句經說の傳承的形態として現はれるものである。

勿論、儒家に於て、展開的經句經說の形態が絶無といふのではないが、少くとも秦代儒家に於ける經句說には、傳承形態の方が展開形態よりも絶多であるといふのである。

今、呂覽に於ける秦代儒家の採説と思はれる主なる經句說例四十三條（内、詩十三、書十、易二、春秋十、論語四、國語一、周書一、孝經一）に就て見るに、大體に、古說原義を傳承したと思はれるものは卅四條、展開したと思はれるものは九條、の如き狀態である。

而して、師法傳承的思想態度は、經書句說の實際上では、其の思想内容説述と、同時に相關聯し合つて現はれ、傳承的儒家思想的經書句說形態となつて形成され來る者である。即ち或る儒家思想的説述に適應せしめんとして、或る經書句說が古義師說のまゝに傳承されて展開されずに、用ひられるのであり、かくて思想態度と内容とは相關表裏をなして一句說形態中に含められる事になるのである。故に、儒家傳承的思想態度が如何様に經句說形態に現はれ、儒家道德思想内容が如何なる經句說形態を成生せしめてゐるか？といふ問題は、同時に考察され得るものである。

以下、此等につき、主なる句說形態十數項を擧げて、稍詳究して見たいと思ふ。

(1) 先づ第一に、詩經風簡兮「執轡如組、」句說到就て、秦代儒家は、

「欲勝人者必先自勝、……欲知人者必先自知、」(呂覽先己篇)

と説き、天下治平には先づ自己を修治すべしとするのであり、此は儒家思想の大眼目たる「修己治人」を論説せんが爲に採説されたものである。然も之が爲に、更に所謂孔子詩説が傳承用説され來つてゐるのであり、曰く、

「孔子曰、審此言也、可以爲天下、子貢曰、何其躁也、孔子曰、非謂其躁也、謂其爲之於此、而成文於彼也、聖人組修其身、而成文於天下矣、」(先己篇)

と。即ち儒家の師説傳承的態度が、此の「修己治國」論をなすに際して、所謂孔子簡兮詩説を傳承せしめたのであり、是に呂覽先己篇には秦代儒家の傳承的修己治人的詩句説形態が存してゐるのである。

(2) 次に、小雅大田「雨我公田、遂及我私、」句說到於て、秦代儒家は、

「三王之佐、其名無不榮者、其實無不安者、功(公に通ず)大也、……三王之佐、皆能以公及其私矣、俗主之佐、……其名無不辱者、其實無不危者、無公故也、」(務本)

とて、人臣の「至公無私」なるべき事を説くのであり、此は又儒家道德思想の樞要點であつて、此の主要思想を論説せんが爲に大田詩句は採用されたのである。

而して、此の詩句を以て、「三王之佐皆能以公及其私矣、」と説きなしてゐるのは、孟子が「公田公事畢、然後敢治私事、」(滕文上、大田詩説)と説いてゐる周代古在詩説と恰當であり、恐らくは秦代儒家の傳承的態度が孟子所説の如き周代古詩説を傳承して採説し來つたものと察せられるのであり、かくして呂覽務本篇には秦代儒家の傳承的臣下務公論的詩句説形態が存してゐるのである。

(3) 次に又、大雅旱麓詩句説「莫莫葛藟、延于條枚、凱弟君子、求福不回」に於て、秦代儒家は、

「達士者達乎死生之分、……則利害存亡弗能、惑矣、故晏子與崔杼盟、而不變其義、……」(知分篇)

とて、達士は義を變じ違へてまで利祿を求めない、即ち義に違ふことを説くのであり、此れ亦儒家思想の要點である。かくて、此の「義」を重んじ「利」を輕んずるといふ思想内容敘述の爲に、早鶯詩句説は、秦代儒家により採用されたのである。

而して、秦代儒家が呂覽知分篇で、

「晏子曰、崔子、子獨不爲夫詩乎、詩曰、莫々葛藟、……要且可以回而求福乎、……」

と採説せるものを見るに、此は明かに周代晏子説く所の詩説を傳承してゐるのである。唯、左氏襄廿五年には、晏子の故事ありて詩句説なければ、左傳より採るのではなかるべく、韓詩外傳二には晏子の故事と詩説とあり、呂覽に略同一であるから、或は不修春秋の如き古書には、かゝるものが存し、それを傳承したか、或は少くとも、周末時に於ては、かゝる晏子詩説なるものが汎行してゐて、それを呂覽・韓詩外傳が傳承したか、に違ひはない。とにかく、秦代儒家の循古的傳承態度は、かくて此の立説の爲に晏子詩句説をそのまゝ傳承し來つたのであつた。（但し此の詩句説例は、字相形態上に於ては周代詩原型を展開してゐる點を併存してゐる様である。）

(4) 次に、大雅抑句説「無競惟人」（求人篇）に於ても、秦代儒家は「治政には賢人を得べし」との思想要點から此詩句を採用した様であり、然も此の立説に當り、特に「競ふこと無らんや惟れ人」と訓義される所謂孔子詩説、

「孔子曰、詩云、無競惟人、子產一稱而鄭國免、」（求人篇）

を傳承採用し來つてゐるのは、やはり秦代儒家の循古的師說傳承態度によるものと察せられるのである。

(5) 又、書經仲虺之誥句説「諸侯之德、能自爲取師者王、……」に於ても、秦代儒家は「君主は驕慢ならず能く師友を擇び取るべき」思想要點から、此の書經仲虺之誥句説を採用した様であり、然も此の君主道論をなすに當り、特に、書經自體からは採らずに、周秦代に流行して荀子並に其派にも見聞されてゐたと思ひ楚莊王説く所の仲虺之誥句説（呂覽驕恣篇）をそのまゝ傳承採説し來つてゐるのは、やはり秦代儒家の古說傳承態度によるものと言へよう。

(6) 又、書經召誥句說「(成王之定成周之說) 其辭曰、惟余一人營居于成周、惟余一人有善、易得而見也、有不善、易得而誅也、」に於ても、秦代儒家は「善徳者は天下を得、不善者は誅せられる」といふ君主道論から之を採用した様であり、且、此の立説に當り、特に周秦古在と思しい南宮括の成王辭説を傳承採説してゐる如きは、やはり秦代儒家の循古的傳承態度によるものと思はれるのである。

(7) 又、不修春秋句說(忠廉篇)かと思はれる「衛懿公好鶴」の一節の如きに於ても、秦代儒家は「忠臣は身を殺して君國に殉すべき」忠廉論から之を採説してゐる様であり、此の立論に際して、不修春秋句說と思はれるものを傳承採用して、左氏閔二年句說を採用しなかつた。蓋し、左氏文では弘演の忠廉が存してゐないからであり、又諸他の古説を採らずに不修春秋系句說を傳承したもの、やはり儒家の尊經尙古的傳承態度によるものであらう。

(8) 又、公羊莊十三年句說(貴信篇)は、やはり秦代儒家の「人主貴信」論から採用され、左氏・穀梁の簡短に過ぎるものを採つて衍説せずに、公羊句說の詳細なるを傳承したものなるべく、儒家的循古傳承態度によるものと思はれる。

(9) 又、左氏昭十九年・廿年句說(慎行篇)は、「人は利を計らず義を慮るべき」を論ずる秦代儒家思想により採用され、全く左氏文を傳承してゐるのであり、儒家の循古的傳承態度は明確にここにあらはれてゐる。

(10) 又、不修晉春秋句說(察傳)と推せるものを、秦代儒家は「是非正不正を明察すべき」思想より採用してをり、特に子貢の故事並に春秋説を傳承してゐる如きは、又循古的師説傳承態度によりたるものと察せられる。

(11) 又、論語先進句說(勸學篇)「孔子畏於匡、顔淵後、孔子曰、吾以汝爲死矣、顔淵曰、子在回何敢死、」に於て、秦代儒家は「師を尊ぶべき」思想から、此の句說を採用した様であり、然も此の立説を爲すに際し、論語句をそのまゝ傳承してゐるのは、やはり秦代儒家の循古的傳承態度によるものであらうか。

(12) 又、孔子語(上德篇)「孔子聞之曰、通乎德之情、則孟門太行不爲險矣、故曰、德之速疾乎以郵傳命、」に於ても、秦代儒家は「德義政治」思想から、此の句說を採用した様であるが、然も此の德治思想立説に當り、孔子語を傳承採説

してゐるのは、やはり秦代儒家の師說傳承態度による所多大であると思はれる。而して、此の孔子語は、論語中になく孟子公孫壯上に、「孔子曰、德之流行、逮於置郵而傳命、」と近似句說あり、恐らくは成形論語の資料となりし孔子語群中から傳承採説されたものであらうか。

(13) 又、周書句說「民善之則畜也、不善則讎也」(適威)に於ても、秦代儒家は「君主の民を愛惠善用すべき」思想から、之を採用してゐるのであり、然も之を、立説するに古在周書句說を傳承略引してゐるのは、やはり儒家の循古的傳承態度によるものであらう。

(14) 又、孝經句說(察微、孝行)及び國語句說(達鬱)の如きも、同様にして、秦代儒家の思想態度と思想内容により、周秦原義句說を傳承してゐるものと想はれる。

以上の如き諸例によつて見ても、秦代儒家の循古的傳承態度並に道德禮治主義思想等の主要傾向が關與することに由つて、秦代儒家經書學上の道德禮治思想的句說及び傳承的經句說形態が成生され來つたことが推察されるのである。

×

×

然るに、秦代儒家の經書句說形態にも展開形態が若干存する様であり、中にも主要なものの一は、

(15) 大雅文王句說「周公旦乃作詩曰、文王在上、……其命維新、」(古樂)であり、秦代儒家は此詩を周公旦の作と見なし、文王在世時のものとする様である。が、詩原文に、「文王陟降、在帝左右、」とあれば、どうも文王歿後に明德を追述したものと見るのが、(事實、墨子詩說にはかく明言してゐる、)原義的であらうし、又其の作者は必ずしも周公旦とは限るまい。即ち、呂覽に於ける秦代儒家文王詩說は、原義を展開してゐると思はれる。蓋し、「古樂詩が先聖王各々の盛德に應じて漸次作成されて來たもの故に、廢すべからず、」と言ふ秦代儒家の觀點から、遂に、周公旦が文王の盛德を讀へて此詩を作つたと展説し來つたらしい。此の場合、古說傳承態度は、思想内容敘述の便利上暫く捨かれ、寧ろ展開的に進んだ様である。尙又、今一つ舉例せんに、論語句說に於て、

(16) 子路篇句說「楚有直躬者……」(當務篇)なるものは、呂覽秦代儒家により、「辨・勇・信・法、共に理に當るべく爲すべき」思想點から、「直^{クスル}躬者^ヲ」の意義に展開して訓解用說されてゐるのである。蓋し、論語原義は、やはり莊子・韓非子等の本文や、鄭注說の如く、「直^{クスル}なる躬^ヲといふ者^ヲ」の意であらう。が、呂覽當務篇の一節では、

「……信而不當理、……大亂天下者也、……楚有直躬者、其父竊羊而謁之上、上執而將誅之、直躬者請代之、孔子聞之曰、異哉直躬之爲信也、故直躬之信、不若無信、齊之好勇者、其一人居東郭、其一人居西郭、勇若此、不若無勇、」

といふのである。即ち始めに二つの「直躬者^ヲ」があり、此は「直^{クスル}躬者^ヲ」の意であり、終りの「直躬之爲信^{タル}」は、直^{クスル}躬^ヲ之爲^{タル}信^{タル}の意で、「躬を直くすることの信は、」といふ事になり、「唯己れの躬をだけ直くして理に當らぬ様な小信は、却て信の無いより劣る、」の意である。又、此等は、次下の、「齊之好^ム勇者^ヲ」と同格の文であつて、此によりて見てもやはり呂覽は「楚有^三直^{クスル}躬者^ヲ」と訓すべきを知る。即ち此の呂覽論語句說に於ても、呂覽秦代儒家の思想敘述上の必要性が古義傳承態度を暫く抑へて、かゝる展開句說に進ませた様である。以上、展開的句說形態も些少は存するのであるが、其の傳承的形態の多きに比すべくもない。即ち儒家の思想内容並に態度上の傾向が、儒家經書學上に多分に道德主義的經句說及び古說傳承的經句說を、成生せしめてゐるといふことが推知されるのである。唯、儒家の如きにも、此の傳承形態と共に展開形態の句說が必ず兩存するといふ事を、了知して置きたいのである。

三

次に、上述の如き秦代儒家の經書學上に於ける二、三の傾向及び事象が、漢代經書學には、如何に關聯し、隨て又、今古文說とは如何に關聯してゐるであらうか？といふことを、些さか考究して見たいと思ふ。

而して、秦代儒家が、博士官學派中にも存してゐたが、寧ろ民間私學派として潜在し、官・私兩學並存狀態を醸成し此現象傾向が漢代博士官學と民間私學との對立狀態に移行し、更に今古文學兩立流行の要因をなしてゐるようかと思はれる。且、漢代經書學上に於ける秦代經書學の影響といふ點からすれば、其の秦代私授の私學こそ最も重大緊要な關與

を有つてゐると言はねばならない。

又、儒家の循古的師說傳承態度は、最も漢代經書學態度の主要なる方面に發展し、師法家法として嚴に傳守承習されるの風尙を形成するに至つた事である。（事例省略。）

然らば、之を經書句說學上に就て檢討すれば如何であらうか？

先づ、前説(1)の詩簡兮句說の如き所謂孔子詩說「謂其爲之於此、而成文於彼也、聖人組修其身、而成文於天下矣」は漢代古文毛詩說に傳承されたと思し、

「組織組也、御衆有文章、言能治衆動於近成於遠也、」

と說かれる。蓋し、周秦儒家に孔子詩說なるものが存し、毛萇は秦漢初に生存した儒家なれば此の孔子詩說を習聞したるべく、隨て之を傳承して詩句を解明した様であり、ここに該古文毛詩說は定着したと思へる。即ち周秦古在の所謂孔子詩說の一は、漢初古文毛詩說に關與し到つてゐる事が今日殘見されるのであり、此の意味に於て漢古文毛詩簡兮の該句說は、其の源流乃至は母胎を周秦代詩說中に既に萌存させてゐると察せられる。

次に、(3)の旱麓詩句說の如き所謂晏子詩說の如きは、韓詩外傳二に傳載されてをり、詩義はもとより、詩字句「延于條枚」までも、全く高誘本呂覽引儒家詩句說と恰當してゐる、その他の漢代詩家句說とは相異なつてゐる。即ち、韓嬰は周秦古說を採つて集說した所多大であるから、呂覽に於ける周末秦儒家の傳へる晏子詩句說は、漢代韓詩今文說に傳承せられた事が今日尙殘見せらるべく、此の意味で、周末秦古在の所謂晏子詩句說は漢代今文韓詩該句說の原型乃至萌芽であると推し得よう。之によつても、亦、漢代韓詩今文句說の萌芽が、周末秦に古存したことが知られるのである。

又、(5)の書經仲虺之誥說の如きは、殆ど全部的に、漢代韓嬰に傳承されて外傳卷六に載せられてゐる。即ち周秦古在楚莊王說く所の仲虺之誥說が、漢代韓嬰の書經學（明確ではないが今文系かと思はれる）に關與し到つてゐる事は明かであると言はねばならない。

又、(6)の書經召詰句説の如きは、現召詰文には無きも、亦原據系書經の本文らしくも思はれるのであり、漢代劉向の説苑至公篇のものと大同し、又漢書婁敬傳に見える婁敬引説とも近似してゐる。即ちかゝる周秦召詰句説が、漢代に於ける書經召詰句説に關與してゐることは、推知されよう。婁敬書經説や劉向説苑書經説などが、今古文いづれの系統に屬せるかは、明確でないが、或は今文書説系かと想はれ、隨て漢代今文召詰句説の萌芽は周末秦に既に萌してゐたかと推される。

次に又、(7)の不修春秋句説「衛懿公好鶴」の如きは、漢代韓詩外傳七に殆ど全部的に傳承されてをり、十分その漢代への關與性を見出し得るのである。

然るに又、(15)の詩大雅文王句説「周公旦作詩」の如きは、古文毛詩・今文魯詩・韓詩に明説するものなく、唯、漢代翼奉今文齊詩説に關係あるものの如くであり、彼の上疏文に曰く、

「臣聞、周至成王、有上賢之材、因文武之業、以周召爲輔、周公猶作詩書、深戒成王、以恐失天下、其詩曰、殷之未喪師、克配上帝、宜監于殷、駿命不易、」(漢書翼奉傳)

と。蓋し引詩四句は文王篇句であり、隨て文王篇は周公旦が成王を戒める爲に作つた詩とするのであり、翼奉は齊詩を后蒼に就て治めた者、齊詩は秦末漢初の齊人轅固生の稱傳する所、夏侯始昌・后蒼に至る。此等によつて見れば、秦代儒家により展説された周公作詩説は、漢初今文齊詩説に傳承されたと思はれ、隨て秦代儒家詩説中に漢今文齊詩説の根型が萌してゐると察せられるのである。

又、(16)の論語「直躬者」説の如きは、漢代孔注古論説に關與されたかと推され、今文魯論鄭注説とは異なる。即ち、古論孔注の根型は呂覽秦儒家説に萌したか。

以上に言及した以外の呂覽儒家經句説は、大體、漢代經句説には關與してゐない様である。併し、今日殘存してゐる經書句説例に就て、尙且かくの如く關聯影響ある説例を見出し得るとすれば、實際秦漢時に在つては、秦代儒家經句説

が漢代經書句說に與へた影響は蓋し鮮少ではなかつたらうと言はるべきである。特に、古文毛傳詩說・今文韓詩說・及び韓詩外傳所載中の仲虺之語說・不修春秋句說・劉向說苑中の召誥句說等への影響關聯相は、十分注目すべきであらうと思ふ。又、呂覽秦代儒家によつて展說成生せしめられたる文王詩說「周公旦作詩」が、漢今文齊詩說への影響關聯の如きは、最も刮目さるべく、尙、論語「直躬者」說の如きも呂覽秦代儒家の展說に成り、漢古文孔注論語說へ影響ありと推されるもの、稍注目さるべきか。かくして、秦代儒家經書句說學は、漢代諸家經說學、隨て今古文說學に關聯影響したりと考定され來る。

四

茲に、上述の如き呂覽にあらはれたる秦時儒家の經書句說學を資料として、秦代經書經說學の一斑を想定しよう。

第一に、秦代儒家には原義を傳承したる經句說の形態が夥多であり、此は師法師說を傳承せんとする儒家的態度が多分に與つて力がある。(尙又、道德思想の敘述といふ事も、關係を有つものであらう。)

第二に、書經召誥說「成王之定成周之說」等によれば、現召誥には逸文あるやも知れず、隨て秦時には、百篇の原據となりし系統の書經も存したるべく、又(7)、(10)の句說例によれば、不修系春秋も存したらしく、更に(8)の例によれば公羊春秋も存したに違ひなく、又(12)の例によれば論語成立の資料となりたる孔子語の群も存したと想はれ、其他、周語・周書・孝經等も汎存したる事を推知し得るのである。

第三に、呂覽秦代儒家の經說學は、周秦古在の諸經說(孔子・晏子・孟子等の詩說、楚莊王・南宮括等の書經說、等々)を傳承するもの最も多く、且それを又漢代諸經說へ關聯させてゐるもの鮮少ならず、更に秦代儒家により周代經說が展開されてゐるものも若干あり、且それ等も亦漢代經說に採收されてゐる様であつて、要するに秦代儒家諸經說は周代諸經說を多分に傳承し若干展開し、その兩者何れも漢代經說に關聯傳承されてゐる事が多大に認められるのである。例へば、

(a) 前例(1)より(14)までは、皆周代原義を秦代儒家が傳承したものであり、
 (b) 前例(15)、(16)及び(3)の「延于條枚」字句などは、周代原義原型を秦代儒家が展開し來つてゐるものであるが、
 (c) 漢代經説は、此等の中、(1)、(3)、(5)、(6)、(7)、(15)、(16)の如き多數を傳承してゐる事である。
 特に(b)の三條の如きは、周代の形態とは異なり、秦代儒家獨特のものを生じ來つてゐるのであるが、もとの周代の原義原型を捨てて用ひず、却て秦代特有の展開説を漢代某經説が傳承してゐるといふ事は、如何に漢代經書經説學が秦代のそれに依存する所の多さを物語つてゐるものと言へよう。

第四に、以上によりて知られる如く、秦代經説には、周・秦・漢共に同致のものもあれば、周代經説を傳承して周代と大同で漢代と異なるものもあれば、周代とは異なる點を展生して漢代に關與し漢代と同致のものもあるし、特に秦代のみに展生されて漢代にも傳承されてゐないといふ特殊のものもあるといふ状態であつて、秦代は周とも漢とも夫々相一致しないものを存してをり、畢竟、周漢に中繼する介在時代の經書經説學を有すると見らるべきであらう。

第五に、前述の如く、秦代經句説には漢代經句説に明かに關與したと推せるものがあるが、其等を詳細に分類して見ると、大體、

- (1) 簡兮詩句説は↓毛傳古文詩説に、
- 3 旱麓詩句説は↓韓詩今文詩説に、
- (5) 仲虺之誥書經説は↓韓詩外傳卷六書經説に、
- (6) 召誥句説は↓劉向說苑至公篇書説・漢婁敬今文(?)書説に、
- (7) 不修春秋句説は↓韓詩外傳春秋説に、
- (15) 文王詩句説は↓(翼奉)今文齊詩説に、
- (16) 論語「直躬者」説は↓古文孔注論語説に、

の如く、漢代古文毛詩・今文韓詩・今文齊詩・今文尙書・古文孔注論語等の諸家今古文句說到影響關與してゐる様である。然る時、此等漢代今古文句説の萌芽乃至原型は、實に秦代儒家經句説乃至は周秦經句説の中に既に萌生してゐ、それが漢代に至つて分立定着するに至つたものと推究されるのである。

第六に、呂覽秦代（儒家）經句説は、後世の今古文系の何れにも關聯あり、一派一系に聯屬してはゐない様である。

かくて、呂覽に於ける秦代儒家の經書經句説學は、重要な經書學史上の推論資料として注目され來ると思はれるのであるが、特に漢代經書學上に於ける今古文句説の定着成生に於て其の今古文句説の根型萌芽が、周秦經句説中に既存してゐたといふ推論を抽出しておきたいのである。